

# 18 世紀イギリス大衆文学の言語特性 —チャップ・ブックの限定形容詞をめぐる—

矢橋 知枝  
仁愛大学人間学部

Exploring Eighteenth-Century Popular British Literature:  
An Analysis of Attributive Adjectives in Chapbooks

Chie YAHASHI

Faculty of Human Studies Jin-ai University

18 世紀イギリスで大流行した大衆文学チャップ・ブックについて、限定形容詞の観点からその言語特性を探ることが本研究の目的であった。電子コーパスによる記述文法書に基づいて形容詞語順構造分析枠組を構築した後、異なるジャンル（伝説・民間伝承・バラッド）から集めた 3 作品を分析した。その結果、126 例の形容詞句が得られたが、2 種以上の限定形容詞が出現した形容詞句は僅か 2 例にとどまった。この 2 例は、ほとんどの形容詞句が偏って生じた伝説にのみ見られた。限定形容詞による修飾がこの伝説作品で多用された要因の一つとして、騎士道と貴族社会を取り巻く非常に華やかな世界を言葉で紡ぎだす、という書き手の意図が挙げられよう。一方、主人公の騎士とその宮廷恋愛の相手である伯爵令嬢がお互いを呼び合う呼称が、この二人の人間関係の変化を反映している点に、18 世紀英語の限定形容詞が有する歴史語用論的要素を見出すことができた。

キーワード：18 世紀チャップ・ブック、限定形容詞、呼称

## 1. はじめに

後期近代英語（18 世紀・19 世紀）は「歴史英語学のシンデレラ」（Jones1989: 279）であり、長らく学術的な注目を浴びることがなかった。これは、英語の歴史を論じるにあたり、文法と語彙において固定化に向かう「英語の標準化」の側面にのみ焦点が当てられてきたためである。しかし、社会言語学的及びコーパス言語学的手法の歴史言語学研究への導入によって、18 世紀英語の言語変化とその社会史的要因の再検討が行なわれたり、地域方言に加えて社会階層方言が発生した重要な時期として、18 世紀英語研究が近年欧米で注目を浴びるようになった。実際に、後期近代英語期の規範・記述文法に言及した Finegan(1998) や 18 世紀英語を概説した Görlach (2001) に加え、英語史コーパスを用いて社会史的・社会言語学的に論じた Beal(2004)・Tieken (2009) などの研究が行われている。

18 世紀文法研究に関しても、欧米では当時の文法・文法家に関する実証的研究 (Yáñez-Bouza 2008) が進められている。また、「18 世紀英語・英国刊

行物データベース」Eighteenth Century Collections Online(ECCO) の編纂により、18 世紀文法家の著作が入手し易くなった。その一方、英国マンチェスター大学では Eighteenth-Century English Grammars (ECGC) Database と呼ばれる 18 世紀文法家情報データベースが編纂されており、今後のさらなる学術的発展が期待できよう。

形容詞研究については、英語史コーパスを用いた形容詞句構造研究 (Fischer 2006) や比較級研究 (Gonzalez-Diaz 2008) などがあるとはいえ、まだまだ進んでいるとはいえないのが実情である。そこで、18 世紀イギリス大衆文学であるチャップ・ブック (Chapbooks) を言語資料に選び、当時の英語における限定形容詞に関する一考察を行うことによって、18 世紀英語に関する言語特性研究の一助としたい。

## 2. 限定形容詞語順構造

形容詞句において、主要な要素である形容詞が 1 つではない場合も多々起きうる。では、2 つ以上の限定

形容詞を含む句構造では、どのような順番に形容詞を並べればいいのか。

本稿では、電子コーパス研究を活用した Quirk et al. (1985), Biber et al. (1999), Carter & McCarthy (2006)

に基づき、英語母語話者にとって自然であろう限定形容詞語順構造基準を設定し、分析枠組を準備したい。

この限定形容詞語順構造について、Quirk et al. (1985) では (1) のように論じられている。

(1) [DETERMINER+] (a) PRECENTRAL + (b) CENTRAL + (c) **POSTCENTRAL** + (d) PREHEAD [+ HEAD]

- a. PRECENTRAL: after the determinatives, the place of peripheral, nongradable adjectives certain, definite
- b. CENTRAL: the place of the central adjectives ie the ‘most adjectival items’ hungry, ugly, funny
- c. **POSTCENTRAL: the place of participles and colour adjectives retired, sleeping; red, pink**
- d. PREHEAD: the place of the ‘least adjectival and the most nominal’ items, denominal adjectives denoting nationality, ethnic background Austrian, Midwestern denominal adjectives denoting ‘consisting of’, ‘involving’, ‘relating to’ experimental, statistical, political

(Adopted from Quirk et al. 1985: 437)

この (1) において問題となるのは、分詞と色彩形容詞が Postcentral Adjectives としてひとくくりにされており、それらの語順まで言及されていないことで

ある。しかしながら、Biber et al. (1999) や Carter & McCarthy(2006) では、この 2 種類の形容詞の順序が論じられている。

(2) Adverb + Adjectives + **Colour Adjectives** + **Participle** + Noun + Head Noun

(Biber et al. 1999: 598)

この (2) では、Biber et al. (1999) が色彩形容詞の後に分詞が来ることを述べている。さらに、Carter &

McCarthy(2006) でも、やはり色彩形容詞が分詞の前に出現することが、図 1 のように示されている。

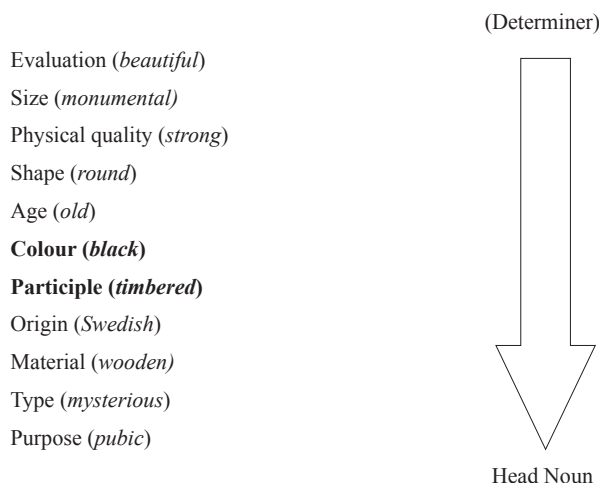


図 1 Carter & McCarthy(2006: 450) による限定形容詞語順構造

よって、現代英語において、最も形容詞らしい要素である Central Adjectives の後に、まずは色彩形容詞、

次いで分詞が続くのであれば、英語母語話者にとって自然な語順であると言えよう。

表 1 限定形容詞構造枠組

	Peripheral A.	Central A.	Colour A.	Participle A.	Prehead
Adjective Types		Evaluation Size Physical quality Shape Age	Colour	Participle	Origin Material Type Purpose

\*[Abbreviation] A. : Adjectives

以上より、本稿では、チャップ・ブックから収集されたデータを分析する際にこの表 1 を分析基準として用い、限定形容詞の語順について論じることとする。

### 3. チャップ・ブックの歴史的背景

イギリス大衆文学に属するチャップ・ブックについて、*The Oxford Companion to English Literature* は下記のように述べている。

#### (3) チャップ・ブックの定義

[A Chapbook is] a modern name applied by book-collectors and others to specimens of the popular literature which was formerly circulated by itinerant dealers or chapmen, consisting chiefly of small pamphlets of popular tales, ballads, tracts, etc. They were issued in great numbers throughout the 18th cent.

(*The Oxford Companion to English Literature*)

このように 18 世紀に大流行したチャップ・ブックであるが、その始まりは 17 世紀にあった。この 17 世紀の時点では、チャップ・ブックは次の (4) のようなブロードサイド・バラッド (Broadside Ballads) と共に、イギリス大衆の間で大変な人気を誇っていた。

#### (4) ブロードサイド・バラッドの定義

In its heyday of the first half of the seventeenth century, a broadside ballad was a single large sheet of paper printed on one side (hence “broad-side”)( with multiple eye-catching illustrations, a popular tune title, and an alluring poem—the latter mostly in black-letter, or what we today call “gothic,” type. (*English Broadside Ballad Archive*)

この (4) の大きな紙の片面に印刷されたブロードサイド・バラッドの人気はやがて陰り、17 世紀末には冊子式のチャップ・ブックの人気が勝り、18 世紀の大流行につながった (Neuburg 1968: 59)。ただし、新聞の台頭によって大人からは忘れられる存在となり、19 世紀にはチャップ・ブックの主な読者層は子どもになったという (Collison 1973: 9; Spufford 1981: 15)。

では、大衆を魅了したチャップ・ブックには、どのようなジャンルがあったのだろうか。

#### (5) チャップ・ブックのジャンル

- a. ‘Fictions’ such as medieval romances, continental borrowings
- b. English legends and folklores
- c. Elizabethan jest books and ballad sheets, provincial lores
- d. Works written by popular authors like Daniel Defoe
- e. “Household manuals”
- f. “Collections of ballads”
- g. “Sensational literature” resembling articles of our newspapers. (Neuburg 1968: 7-16)

この (5) の多種多様なジャンルを取り扱ったチャップ・ブックであったが、現代の我々が普段目にする「書籍」と同じようなものであったのだろうか。次の (6) にその大きさ・分量を示す。

#### (6) チャップ・ブックの大きさ・分量

##### a. Size

Octavo: 16 pages (from the 17th century to the first quarter of the 18th century)

Duodecimo: 24 pages (during the rest of the 18th century) (Ashton 1882: ii)

b. Length

5,500 to 7,000 words (Collison 1973: 2)

つまり、(6)でいうチャップ・ブックとは、新書版もしくは文庫版ほどの大きさの「パンフレット」のようなものであり、安価で庶民にも手が届くものであった (Neuburg 1968: 30; 小林 1993: 23-26)。そして、その購入方法は簡単であり、印刷業者あるいは chapmen と呼ばれた行商人から手に入れることができたという (Neuburg 1968: 30)。

18世紀に主流だったチャップ・ブックは、分量も24頁と薄く、木版画によるイラストが挿入されている。このチャップ・ブックの言語特性を限定形容詞構造の側面から分析すれば、どのような特徴が見られるだろうか。

4. 言語分析

4. 1. 分析手法

まず、分析対象となる言語資料を選定することとした。日本国内ではチャップ・ブックそのものを入手することは容易ではない。本稿では量的分析を行うのではなく、今後の研究へとつながる手がかりを得るため、より詳細な分析を可能にする意図でもって、Neuburg (1968) の *The Penny Histories* に収録された18世紀のチャップ・ブック作品より、次の(7)に挙げられた3作品を選んだ。

(7) 本稿の言語資料

a. *The History of Guy, Earl of Warwick* (以降 *Guy*)

b. *The Interesting Story of the Children in the Wood*  
(以降 *Children*)

c. *An Elegy on the Death and Burial of Cock Robin*

(以降 *Cock Robin*)

この言語資料となったチャップ・ブックのジャンルは、(7a)は偉人の功績を語る「伝説」、(7b)は口承で代々伝えられてきた「民間伝承」、(7c)は物語を短い詩の形で表した「バラッド」である。

次いで、それぞれのチャップ・ブックに出現する形容詞句を抜き出し、表1の形容詞句構造枠組に沿ってExcelファイル表に入力し、形容詞句内の限定形容詞について分析を行った。

4. 2. 分析結果

本稿の目的は、後期近代英語期の形容詞句に複数の限定形容詞が出現した場合、それらの語順が現代英語での構造基準に沿っているのかどうかを検証することであった。18世紀のチャップ・ブック3作品の形容詞句について、句構造における限定形容詞出現数についてまとめたものが、表2である。

表2で表されるように、本研究で用いたチャップ・ブックにおいては、126例の形容詞句が見つかった。その具体例を次の(8)に示す。

(8) チャップ・ブックの限定形容詞 (1種のみ) 例

a. *a worthy Knight of chivalry* (Guy 5)  
[Evaluation]

b. *two strong ruffians* (Children 7)  
[Physical quality]

c. *a pretty Dove* (Cock Robin 13)  
[Evaluation]

表2 18世紀チャップ・ブックにおける限定形容詞句

	The number of adjectives			
	one	two	three and more	Total
<i>Guy</i>	101 (98%)	2 (2%)	0	103 (82%)
<i>Children</i>	16 (100%)	0	0	16 (13%)
<i>Cock Robin</i>	7 (100%)	0	0	7 (5%)
Total	124 (98%)	2 (2%)	0	126 (100%)

\*[Abbreviations] *Guy*: *The History of Guy, Earl of Warwick*; *Children*: *The Interesting Story of the Children in the Wood*; *Cock Robin*: *An Elegy on the Death and Burial of Cock Robin*

各作品での内訳は、*Guy* が 103 例 (82%)、*Children* が 16 例 (13%)、*Cock Robin* が 7 例 (5%) となり、*Guy* での形容詞句出現率が非常に高いことが分かった。

また、形容詞句内に複数の限定形容詞が出現する例は、*Guy* の 2 例 (2%) のみであった。

(9) チャップ・ブックにおける限定形容詞 (複数)

- a. thy *high applauded* name (Guy 7)  
[Size + Participle]
- b. the *English cowardly* dogs (Guy 21)  
[Origin + Type]

この (9) の例において、同一の形容詞区内に出現する複数の限定形容詞語順は、(9a) では Size → Participle, (9b) Origin → Type とそれぞれなっており、本稿で構築した語順構造基準に対する逸脱は見られなかった。

この 3 作品において、124 例 (98%) の形容詞句で限定形容詞 1 種のみという結果が得られた。つまり、チャップ・ブックの形容詞句は、通常 1 つの形容詞で構成されていることが明らかになった。また、本稿で分析した 3 作品の中で形容詞句数が非常に多い *Guy* にのみ、同一形容詞句内に複数の形容詞が見られる 2 例が生起していたことも分かった。さらに、この 2 例における語順は、本研究の限定形容詞語順基準を遵守したものであった。

以上の分析結果より、チャップ・ブック 3 作品における限定形容詞句について、本研究の目的である語順構造に関する考察は行い難いことが明白となった。そこで、次節では、なぜ *Guy* のみに限定形容詞句数が偏ったのかについて、考察を進めることとする。

#### 4. 3. 考察

##### 4. 3. 1. 限定形容詞句数

本研究で扱ったチャップ・ブック 3 作品においては、*Guy* の形容詞句数が他の 2 作品と比べて圧倒的に多い。この要因の一つとして、ジャンルの違いが挙げられよう。「伝説」である *Guy*、「民間伝承」である *Children*、「バラッド」である *Cock Robin* において、それぞれのジャンルのもつ特徴がどのように言語化さ

れているのかについて、限定形容詞の観点からこれら 3 作品の冒頭を比べてみよう。

(10) *Children* および *Cock Robin* の冒頭部分

a. *The Interesting Story of the Children in the Wood* 第 1 頁

Now ponder well, ye parents dear,  
The words which I shall write,

A dismal story you shall hear,  
In time brought forth to light.

A merchant of no small account,

In England dwelt of late,

Who did in riches far surmount  
Most men of his estate.

Yet sickness came, and he must die,  
No help his life could save;

In anguish too his wife did lie,  
Death sent them to the grave.  
No love between this pair was lost,  
For each was mild and kind;

Together they gave up the ghost,  
And left two babes behind.

(*Children* 1)

b. *An Elegy on the Death and Burial of Cock Robin* 第 1 頁

WHO kill'd Cock Robin?

I, says the Sparrow,  
With my bow and arrow,  
And I kill'd Cock Robin,

This is the Sparrow,

With his bow and arrow (Cock Robin 1)

民間伝承を基とした *Children* では遺棄された二人

の子どもが亡くなり、バラッドである *Cock Robin* ではコマドリ殺しの犯人捜しが行われる。この2作品の冒頭部分に現れる限定形容詞句として、(10a)の *Children* では *A dismal story* と *A merchant of no small account* があったが、(10b)の *Cock Robin* の第1頁目には見当たらなかった。

そもそも形容詞とは、どのような機能を持っているのだろうか。形容詞が有する役割として、Carter & McCarthy (2006) は次のように述べている。

(11) 形容詞の役割

“adjectives describe features and qualities of entities (people, animals and things) denoted by nouns and pronouns” (Carter & McCarthy 2006: 539)

この(11)が示すように、形容詞は形容詞句内の名詞や代名詞の特性などを記述する役割を持っている。

この *Children* で用いられる形容詞句ではどうか。 (10a) に出現した形容詞句は、作品全体に関する作者の考えを *A dismal story* と表現したり、子供達の父親を *A merchant of no small account* と紹介したりしている。もしこの裕福な商人であった父親が亡くなりさえしなければ、この二人の子供達は幸せな人生を送れたのではないか、という印象を読者に与えるかのようである。よって、このチャップ・ブックを読み始めたばかりの読者に、陰鬱な世界観を植えつけるような形容詞句の使い方がなされており、騎士や貴族の華麗なるロマンスを描く *Guy* とは異なるようである。

この *Guy* であるが、Brown (1900: 14) によれば、13世紀まで遡ることができ、最も古い印刷形式は1570年前になくなった William Copland によるものだという。また、*Guy* が描く伝説は、アーサー王の流れを汲む中世の騎士道物語 (Chivalric Romance) である。

(12) 騎士道物語の定義

The principal kind of romance found in medieval Europe from the 12th century onwards, describing (usually in verse) the adventures of legendary knights, and celebrating an idealized code of civilized behaviour that combines loyalty, honour, and courtly love. The

emphasis on heterosexual love and courtly manners distinguishes it from the *chanson de geste* and other kinds of epic, in which masculine military heroism predominates. The most famous examples are the Arthurian romances recounting the adventures of Lancelot, Galahad, Gawain, and the other Round Table knights. These include the Lancelot (late 12th century) of Chrétien de Troyes, the anonymous *Sir Gawain and the Green Knight* (late 14th century), and Malory's prose romance *Le Morte Darthur* (1485). For a fuller account, consult Lee C. Ramsey, *Chivalric Romances* (1983).

(*The Oxford Dictionary of Literary Terms*)

この(12)が述べる中世ロマンスでは、伝説の騎士達には、冒険に出かけることや忠誠と名誉と宮廷恋愛といった騎士に相応しい振る舞いが求められる。この伝説というジャンルに属する *Guy* は、下記のような冒頭で幕を開ける。

(13) *The History of Guy, Earl of Warwick* 冒頭部分第1頁

CHAP I.

GUY'S PRAISE. HE FALLS IN LOVE WITH THE FAIR PHILLIS.

IN the blessed time when Athelstone wore the crown of the English nation, Sir Guy, Warwick's Mirror, and all the world's wonder, was the chief hero of the age; whose prowess so surpassed all his predecessors, that the trump of fame so loudly sounded Warwick's praise, that Jews, Turks, and Infidels became acquainted with his name.

(*Guy* 1)

この(13)での *THE FAIR PHILLIS*, *the blessed time*, *the chief hero of the age* のような形容詞句は、全て肯定的で豪華なニュアンスを醸し出している。主人公である *Guy* の素晴らしさや *Guy* が恋焦がれる *Phillis* の美しさなどに関し、読者が *Guy* の輝かしい世界を喚起するための意味特徴を添える役割を果たしているの

はなかろうか。よって、伝説の騎士の功績や身分の高い貴族女性との宮廷恋愛を物語るこの作品では、頻繁に取り入れられる華やかな形容詞句が、一般大衆である読者を華やかな世界へと導く役割を果たしているであろう。

従って、以上のような3作品における世界観の違いが、形容詞句生起数に反映された可能性が示唆されよう。

#### 4. 3. 2. 呼称

他の2作品と異なって形容詞句数が圧倒的に多かった *Guy* であるが、冒頭に出現する限定形容詞句 *THE FAIR PHILLIS* は更なる興味を惹く。この限定形容詞句自体は *Phillis* の美しさを読者に伝える役割を果たしているが、*Guy* を読み進めて行く上ではこの「*fair+*名前」という言語パターンは「呼称」として多用される。この呼称とは「話し手が聞き手に言及するときを使うことばや表現の総称」であり、歴史語用論でも取り上げられている(高田・椎名・小野寺 2011: 35)。そこで、本項では、*Guy* の呼称について歴史語用論の立場よりさらなる考察を行いたい。

自分よりも身分が高い *Phillis* に恋い焦がれている *Guy* は、*Phillis* の父である Warwick 伯爵に城に招かれる。片思いの相手である *Phillis* と偶然二人きりになることできた *Guy* は、自分を抑えられずに、思わず(14)のように求婚してしまう。

#### (14) *Guy* による最初のプロポーズ場面

*GUY* immediately advanced to fair *Phillis*, who was reposing herself in arbour, and saluted her with bended knees, All hail, fair *Phillis*, flower of beauty, and jewel of virtue, I know great princes seek to win thy love, whose exquisite perfections might grace the mightiest monarch in the world; yet may they come short of *Guy's* real affection, in whom love is pictured with naked truth and honesty, disdain me not for being a steward's son, one of thy father's servants.

*Phillis* interrupted him saying, Cease, bold youth, leave off this passionate address : — You are but young and meanly born, and unfit for my degree; I would not

that my father should know this.

(*Guy* 5)

この(14)では、*Guy* が *fair Phillis*, *Phillis* は *bold youth* という呼称を、お互いに用いている。*Guy* は自分の心をとらえて離さない美しい *Phillis* に対して、*fair Phillis* と呼びかける。この場合の *fair* とは、"[A] favourite vocative element in the seventeenth century, forming part of many complimentary expressions." (Dunkling 1990) であり、*Guy* が彼女の美しさを讃えるための呼称と分かる。しかし、伯爵の女子相続人である *Phillis* にとっては、自分の父に仕える *Guy* の求婚は到底受け入れられるものではなく、身分の違いを弁えない失礼極まりない行為以外何物でもない。その不快感は、限定形容詞 *bold* と *Guy* の名前ではなく普通名詞である *youth* という組み合わせによる呼称によって露わされている。また、*Guy* が求婚の言葉を最後まで言わせてもらえなかったことから、この時点の二人の関係は最悪と言ってもよいであろう。

しかしながら、*Guy* はどうしても *Phillis* を諦めることができず、(15)に描かれているように、2度目の求婚をする為に決死の覚悟で *Phillis* を訪ねる。

#### (15) *Phillis* が *Cupid* に心に矢を射抜かれる場面

*GUY*, thus discomfited, lived like one distracted, wringing his hands, resolving to travel through the world to gain the love of *Phillis*, or end his days of misery. Long may Dame Fortune frown, but when her course is run she sends a smile to cure the hearts that have been wounded by her frowns; so *Cupid* sent a powerful dart, representing her a worthy Knight of Chivalry, saying, This Knight shall become so famous in the world, that his action shall crown everlasting posterity. When *Phillis* found herself wounded, she cried, O pity me, gentle Cupid, solicit for me to thy Mother, I will offer myself up at thy shrine. ( *Guy* 5 - 6)

しかし、この(15)が示すように、1度目の求婚の後に *Cupid* に矢を射られ、また *Guy* が世界でその名が轟く "a worthy Knight of Chivalry" となるという予言を聞かされた *Phillis* は、*Guy* に対する態度を軟化さ

せて行く。その Phillis が自分の心に矢を放った張本人に対して *gentle Cupid* と呼びかけるのは、興味を添える。なぜならこの「*gentle*+ 名前」という呼称パターンこそ、次の (16) に描かれる Guy と Phillis の関係に変化をもたらすきっかけとなるからである。

(16) Guy による二度目のプロポーズ場面

So coming again to his Phillis, said, fair Lady, I have been arraigned long, and now an come to receive my just sentence from the Tribunal of Love; It is life or death, fair Phillis, I look for let me now languish in despair, give Judgment, O ye fair, give Judgment, that I may know my doom; a word from thy sacred lips can cure a bleeding heart, or a frown can doom me to the pit of misery. Gentle Guy, s-aid she I am not at my own disposal, you know my father's name is great in the nation, and I dare not match without his consent. (Guy 6)

2 度目の求婚を始めた (16) では、Guy は 1 度目と変わらず *fair Lady* や *fair Phillis* を用いて Phillis を讃えるかのような呼称を用いている。それに対して、Phillis は *Gentle Guy* という呼称で呼びかけた上、自分の父である伯爵から Guy 自身が同意を得られれば、Guy との結婚を考えると言う。この *gentle* を用いた呼称パターンは “Used in polite or ingratiating address, or as a complimentary epithet. Obs” (*Oxford English Dictionary*) であるので、Phillis の Guy に対する丁寧さや好意が示されている。この Phillis の自分への好意的な態度を感じ取った Guy は、伯爵の許しを得る前に、まずは自分との結婚の約束を Phillis 本人から、(17) のように取り付けようとする。

(17) Phillis が Guy のプロポーズを受け入れる場面

Sweet Lady, said Guy, I make no doubt, but quickly to obtain his love and favour; let me have thy love first, fair Phillis, and there is no fear of thy father's wrath preventing us. It is an old saying, Get the good will of the daughter, and that of the parent will soon follow.

Sir Guy, quoth Phillis, make thy bold achievements

and noble actions shine abroad, glorious as the sun, that all opposers may tremble at thy high applauded name and then thy suit cannot be denied. (Guy 6-7)

Guy はこの (17) において、賞賛するための *fair Phillis* ではなく、*Sweet Lady* という呼称を用いている。この限定形容詞である *sweet* が呼称となる場合は “intimacy and friendship” (Dunkling 1990: 9) となるので、父親の不興を買うことを何よりも恐れる Phillis へ、Guy が愛情あふれる態度で説得を続けていることが分かる。この Guy に心打たれた Phillis は、自分とは身分が違うと言い放った最初のプロポーズとは異なり、“polite form of address” (Dunkling 1990: 9) である *Sir Guy* という相手の社会的地位を認めた呼称で呼びかけ、Cupid から聞かされた Guy に関する予言 “a worthy Knight of Chivalry” の実現を条件とし、Guy の求婚を受け入れる。

このように、Guy の呼称は Phillis を讃える *fair Phillis* から内面的な愛おしさも含める *Sweet Lady* へ、Phillis の呼称は自分とは身分が違うことを言外に示す *bold youth* から好意を表す *Gentle Guy*、そして、求婚相手として社会的に自分にふさわしい *Sir Guy* へと変化を遂げていた。従って、Guy と Phillis の恋が成就するまでの過程において、この二人の人間関係の変容がそれぞれに対する呼称に反映されている様子を、歴史語用論的観点より論じることができた。

5. おわりに

18 世紀イギリス大衆文学であったチャップ・ブックの形容詞とその語順構造から論じるため、*The History of Guy, Earl of Warwick* (伝説)・*The Interesting Story of the Children in the Wood* (民間伝承)・*An Elegy on the Death and Burial of Cock Robin* (バラッド) という異なるジャンルから 3 作品を取り上げた。その結果として、3 作品のチャップ・ブックにおいて、形容詞句内に出現する限定形容詞数は 1 種である傾向が認められた。ジャンル別では、民間伝承やバラッドでは形容詞句数そのものの少ないことに対し、伝説では形容詞句自体が頻繁に表れるだけでなく、複数の限定形



容詞を有する形容詞構造もわずかであるが見られた。

本稿の目的であるチャップ・ブックの形容詞句とその語順構造については、同一句内での形容詞が複数出現する例が極端に少なく、現代英語の限定形容詞語順基準を用いての考察を進めることはできなかった。しかし、限定形容詞修飾手法の多用は、騎士の偉業や身分の高い女性との宮廷恋愛などの騎士道物語を描いた *Guy* において、華やかな物語の世界を読者の前に提示する機能があると考えられた。また、*Guy* と *Phyllis* が身分の違いを乗り越えて恋愛を成就させる場面では、この二人の人間関係の変化にお互いの相手への呼称が呼応する様子を、歴史語用論的側面から論じることができた。

形容詞語順構造から端を発した本稿は、呼称という思いもよらない観点より、18 世紀チャップ・ブックにおける限定形容詞を考察することとなった。人間関係の指標である呼称において、限定形容詞がどのように関わっているのか、歴史語用論の枠組で今後研究を進めていきたい。

## 引用文献

- Ashton, Johh. 1882. *Chapbooks of the Eighteenth Century*. London: Skoob.
- Beal, Joan. 2004. *English in Modern Times*. London: Hodder Education.
- Biber, Douglas et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Brown, Arthur C. L. 1900. "The Source of a *Guy* of Warwick Chapbook." *The Journal of Germanic Philology*. 3(1), pp.14-23
- Carter, Ronald and Michael McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of Cambridge*: Cambridge UP.
- "Chapbook." 1985. *The Oxford Companion to English Literature* 5th ed.
- "Chivalric Romance." 2008. *The Oxford Dictionary of Literary Terms*. 3<sup>rd</sup> Ed. Oxford: Oxford UP.
- Collison, Richard. 1973. *The Story of Street Literature*. London: Dent.
- Dunkling, Leslie. 1990. *A Dictionary of Epithets and Terms of Address*. Oxford: Routledge.
- "Fair." in Dunkling. *A Dictionary of Epithets and Terms of Address*.
- Finegan, Edward. 1998. "English Grammar and Usage," in Romaine (ed.) *The Cambridge History of the English Language*, volume IV; 1776-1997. Cambridge: Cambridge UP. pp.536-87.
- Fischer, Olga. 2006. "On the Position of Adjectives in Middle English." *English Language and Linguistics* 10(2), pp.253-88.
- Fumerton, Patricia. *English Broadside Ballad Archive*. U of California at Santa Barbara. Web. 16 December 2014.
- "Gentle." *Oxford English Dictionary*. 3<sup>rd</sup>. Web. 16 December 2014.
- Gonzalez-Diáz, Victorina. (2008) *English Adjective Comparison*. Amsterdam: John Benjamin.
- Görlach, Manfred. 2001. *Eighteenth-Century English*. Heidelberg: Winter.
- Jones, Charles. 1989. *A History of English Phonology*. London: Longman.
- 小林章夫 1988『チャップ・ブック』 駸々堂
- Neuburg, Victor Edward. 1968. *The Penny Histories*. London: OUP.
- Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Spufford, Margaret. 1981. *Small Books and Pleasant Histories*. Cambridge: Cambridge UP.
- 高田博行・権名美智・小野寺典子編 2011 『歴史語用論入門』 大修館書店
- Tieken Boon Van Ostade, Ingrid. 2009. *An Introduction to Late Modern English*. Edinburgh: Edinburgh UP.
- Yañez-Bouza, Nuria. 2008. "Preposition Stranding in the Eighteenth Century: Something to Talk About." in Tieken (ed) *Grammars, Grammarians and Grammar-Writing in Eighteenth-Century England*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. pp.251-77.

